

# 助詞「が」の通時的考察

我妻多賀子

## 一 はじめに

言葉の意味は時代と共に変遷して行く。例えば「美しい」という語が、その昔、平安朝時代には、小さいものを指して、「かわいらしい」という意味で用いられていたことなど、言葉の意味の変遷を知る上の好例として盛んに耳にするものである。

その他、「とがむ」に「怪しむ」の意味があり、「きりぎりす」が、今でいう「コオロギ」を指していたことなど数え上げればきりが無い。そして、この言葉の意味の変遷は、右に上げたような、形容詞、動詞、それに名詞などの外、一見したところではその変化がほとんどわからない助詞にまで及んでいる事が近來の詳しい研究で明らかにされつつある。

ここでは、そういう助詞の中から、格助詞の「が」を取り上げて、その意味、用法などの時代的な移り変わりを考察してみることにした。

調査の方法は、上代から近世までの、日本文学史上を飾る幾多の文献の中から代表的なものを全部で二十五選び出し、それらの作品について抜き出した助詞「が」の一つ一つを、用法（歌、会話、地の文のいずれに使われているか）、接続（どんな言葉を承けているか、又どんな言葉が下に来ているか）、意味の三つの方面から考察してみた。

それでは、その調査結果のあらましを、上代から順に、述べてみることにしよう。

## 二、上代（奈良時代）

この時代の代表文献として選び出したものは、古事記（記）、日本書紀（紀）、万葉集（万）、祝詞（祝）、宣命（宣）の五作品である。以下、文中で例を上げたりする時に作品名を略して記す事があるが、その場合、各作品の下の（ ）の中の略号をもって表わす事にする。尚、言うまでもないことだが、この期の文献中から抜き出した「が」の用例は、すべてその訓みがはっきりとしている一字一音書きのものばかりを対象としたので、一応断わっておく。

さて、それではまず、この五作品について眺めた結果を、用法から見て行くことにしよう。

### ① 用法

対象として取り上げた「が」の例を一字一音書きのものと限つたためもあるが、古事記では、全92例のうち91例までが、又、日本書紀では、全74例のうち73例までが、歌に用いられ、残りの1例は、それぞれ会話文に見えていた。万葉集に出て来た「が」は、合計して585例の多くに達したが、これはすべて歌の例である。又、祝詞の25例、宣命の85例は作品の内容から推しても当然のことであるが、いずれも、歌、会話のどちらにも当てはまらない、いわゆる地の文として用いられていたものであった。

以上の点から考えて、助詞「が」は、この上代では、特別にその用法が限定されていたわけではなく、歌にも、会話文にも、地の文にも自由に使用されていたということが言えよう。

下に来ている言葉、つまり「が」の係って行く語については、次の③の項で、意味と関連させながら述べてみたので、ここでは「が」の上に来ることば、つまり、「が」が承ける語のみについて触れることにする。

五作品を通してみたところ、圧倒的に多い承接関係は、体言十助詞「が」という形であった。この場合、体言としては、普通名詞や固有名詞の外に、我・君・汝・己・誰・吾・其などの人称代名詞の多いが目立ち、中でも、第一人称の代名詞「我」に続く「が」の例は各作品とも20〜30%の高率を占めていた。

体言以外の用言を承ける「が」の例は、五作品いずれも、一割にも満たず、非常に少ない。そして、この用言をもう少し細かく見れば、動詞の四段活用・上一段活用・ラ行変格活用・下二段活用、それに、形容詞、又、助動詞の「き」「ず」「けむ」「む」などであるが、これらはいずれも連体形をとって、体言と同じように用いられていた点で共通していた。

以上記したように、この時代の「が」の承接関係を調べたところ、体言、それに用言の連体形を承ける例ばかりであったということは、「が」が格助詞である関係上、当然のことであって、特別に問題とすべきものではないと思ふ。

### ③ 意 味

大きく分けるとこの時代の助詞「が」は、次の四つの意味に分類出来る。ここで例を上げながら、その一つ一つについて説明を加え更に現代の用法との比較検討を試みることにしたい。

#### (イ) 連 体 格

一番量的に多く、且つ、五作品のいずれにも見られたものは、体言と体言とを結んでその関係を示す、いわゆる連体格の「が」であった。

多知賀遠（大刀が緒）

（記・上・神代）

久麻加志賀波（熊白禰が葉）

（記・中・景行）

摩呂餓智（まろが親）

（紀・十・応神）

婆利我曳陁（榛が枝）

（紀・十四・雄略）

烏梅我志豆延（梅が下枝）

（万・五・八二七）

子等我手（子らが手）

（万・十・一八一五）

多豆我許惠（鶉が声）

（万・十五・三五九五）

道祖我兄（ふなどが兄）

（宣・二八）

出雲臣等我遠つ神（出雲臣らが遠つ神）

（祝・出雲国造神賀詞）

右に上げたものはほんの一例であるが、これらを見ると、いずれも「が」は、所有、所属、類似などの意を表わして、下の名詞を修飾している事がわかる。ところで、ここに記したような連体格の「が」は、果たして現在でも耳にする用法であろうか。一寸考えてみただけでも、現在、このような場合には、「が」の代わりに「の」を使う方が一般的であると言えよう。しかし、それでは、連体格の「が」が全面的に今では使われていないのかというところでもない。右に並び上げたような「が」の例は、ほとんど今では耳にしないが、次のような場合には、今でも連体格として、助詞の「が」を用いているのである。

まずその第一は、「我が国」、「君が代」など、人称代名詞に「が」がついて、下の名詞を修飾している場合である（注 現行文法では「我が国」という場合「我が」を連体詞と取っているが、当時としてはこれが「我」と「が」に分けられることは左のような例などから考えて可能と言えよう。例、我は行く（和波由久）万・十四・三三六六。我にな絶えそね（和余奈多妻曾称）万・十四・三三七八。我を召すらめや（和乎召良米夜）万・十六・三八八六、但しはじめの二つは東歌の例である）。しかし、これらは、どれも慣用語のようにして用いられている事に気がつく。その他、この種の例としては、「我が家

は楽し<sup>い</sup>、<sup>い</sup>我が愛は終わりぬ、<sup>い</sup>誰がために鐘は鳴る<sup>い</sup>などの例が考えられるが、いずれもこれらは慣用句であつて、文語的に用いられ、日常会話では聞けないものばかりである。

もう一つ、連体格の「が」で現在耳にするものとして、地名に使われている例がある。

例えば、霞が浦、霧が峰、由比が浜などの「が」であるが、これらもやはり、「が」をわざわざ助詞と取らず、霞<sup>が</sup>が浦と続けて一名詞と考えれば、一種の熟語と解されるから、「が」の一般的な用法とは言えない。

以上のことから、連体格の「が」は、現在では使われていないことはないが、その用法が非常に限定されていると言えよう。

けれども、上代に於ては、連体格の「が」がかなり広範囲に用いられていた事、先に幾つか上げた例を見ても明らかであろうし、更に、現在少しばかり残存している、人称代名詞に「が」のついた例、それに、地名に使われている「が」の例が、左に記すように、既に上代でも多く用いられているのである。

まず、人称代名詞に連体格の「が」がついた例としては、

企弭我<sup>が</sup>譽贈比（君が装）（紀・二・神代）

和<sup>が</sup>餼<sup>が</sup>糲<sup>が</sup>積（我が御酒）（紀・五・崇神）

奈何名（汝が名）（万・五・八〇〇）

和我夜度（わが宿）（万・五・八五一）

和我於保伎美（わが大君）（万・十八・四〇五九）

其我名（しが名）（宣・四四）

某我弱肩（なにがしが弱肩）（祝・大殿祭）

などがあり、又、地名に用いられていた連体格の「が」には、

意富韋古賀波良（大猪子が原）

（記・下・仁徳）

袁牟漏賀多氣（袁牟漏が嶽）

（記・下・雄略）

弓月我高（弓月が嶽）

（万・十・一八一六）

於保屋我波良（大家が原）

（万・十四・三三七八）

野嶋我左吉（野島が崎）

（万・十五・三六〇六）

などの例が上げられる。

ところで、今迄上げた連体格の「が」の例は、形式上どれも、体言十「が」十体言という物であった。だが、ここで、左に記すような特別な形の場合にも、「が」を連体格として考えてみたので、追記しておく事にしたい。

それは、万葉集だけに数例現われたものだが、形式上、用言の連体形十「が」十形容詞の語幹十接尾語「さ」というものである。

大滝を過ぎて夏身に近づきて清き川瀬を見何明沙

（見るが、さやけさ）

（万・九・一七三七）

夕月夜影立ち寄り合ひ天の河漕ぐ舟人を見流我等母之佐

（見なが、衆しき）

（万・十五・三六五八）

遠き山関も越え来ぬ今更に逢ふべきよしの奈伎我佐夫之佐

（無きが、さぶしき）

（万・十五・三七三四）

右に上げた例でわかるように、これらは意味的に見ると、先述した連体格の「が」の例とは異なっている。乃ち、一番初めの例で言えば、全体として、「大滝を過ぎ夏身に近づいて清い川瀬を見ると清澄な気分がするよ」と解されるから、この場合、助詞の「が」は「見る」と「さやけさ」が同格である事を示している。つまり、「見る事」に対する自分の意見として、「さやけき事であるよ」と感動をこめた余情表現を用いているわけである。以下、同じように、その部分だけを訳せば、「見るのが羨しいよ」、「無いのが淋しいことだよ」となる。したがって、意味的には、「が」を連体格と取るのが至当ではないかもしれないが、形の上で見ると、用言の連体形も、又、形容詞

の語幹「ナ」という形も、体言に準ずるものと考えられるので、このような場合の「が」を、以下、連体格の意味グループの中に入れて考えてみたい。尚、言うまでもないことだが、このような「が」は現在では用いられていない。

いずれにしろ、現在、ごく改まった場合にしか使われていない連体格の「が」は、上代では、質量共に極めて豊富に使われていたということが言えよう。

続いて第二番目に考えられる意味として、主格の「が」について述べることにしよう。

(四) 主 格

「が」が主格を示す場合、これを意味的に見ると、その係って行く語によって、大きく二つに分ける事が出来る。一つは、「が」が述語である用言に係って行くもの、もう一つは、「が」が、述語である用言を承ける体言に係って行くものである。そして、この二つの用法は、いずれも現在でも盛んに用いられている。例えば、「小鳥が鳴く」と言う場合、主格を示す「が」は、「鳴く」という述語に係っている。ところで、「小鳥が鳴く声」という文章になると、主格の「が」は、「鳴く」という用言を承けた体言の「声」に係っていることになる。

そこで、主格を示す「が」は、まず大きく右の二つの用法に分けて、前に記した「小鳥が鳴く」のように、「が」が直接述語に係って行くものを、単なる主格を表わす「が」、又、後者の「小鳥が鳴く声」のように、「が」が、述語を承ける体言に係って行くものを、係体言主格の「が」として考えて行きたい。

それでは、初めに主格の「が」から考察の結果を述べてみることにしよう。

主格の「が」は、上代では非常に使用率が少なく、宣命、祝詞の二作品には1例も見当たらないし、あとの三作品でも、わずか10%前後という低率を示している。しかも、その使用方法を見ると、「が」の係って行く述語が、

いずれも、用言の未然形、又は已然形に限られていることに気がつく。

これは、現在、主格「が」の係って行く述語が、用言のどんな形の場合でも広く用いられているところから推して、顕著な特色として注目すべきであろう。

例えば、「が」が、未然形に係り、「(が)もしくならば」という仮定条件を示すものとしては、

青山に比賀<sup>(目が、隔らば)</sup>迎久良婆ぬばたまの夜は出でなむ

(記・上・神代)

大魚よし鮪突く海人よ斯賀<sup>(其が、あれば)</sup>阿礼婆心恋しけむ鮪突く鮪

(記・下、清寧)

困奈<sup>(前妻が)</sup>瀾餓着乞はさば立椈梭の実の無けくを扱きしひゑね

(紀・三・神武)

旨我<sup>(其が、無ければ)</sup>那稽<sup>(無ければ)</sup>爰誰か繫けむよあたら墨繩

(紀・十四 雄略)

家に在りて波々<sup>(母が、とり見せ)</sup>何刀利美婆慰むる心はあらし死なば死ぬとも

(万・五・八八九)

明日よりはわれは恋ひむな名欲山石踏み平し君我<sup>(君が、越えいなば)</sup>越去者

(万・九・一七七八)

玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらちねの母我<sup>(母が、問はさば)</sup>問者風と申さむ

(万・十一・二三六四)

里近く伎美我<sup>(君が、なりなば)</sup>奈里那婆恋ひめやともな思ひし吾を悔しき

(万・十七・三九三九)

浜辺より和我<sup>(わが、うち行かば)</sup>宇知由可波海辺より迎へも来ぬか海人の釣舟

(万・十八・四〇四四)

などの例が上げられる。又、已然形に「が」が係って、「(が)いだからこそ」とか「(が)いであるとも」などの意になった例としては、

吾<sup>(わが、背子が)</sup>背子我かく恋ふれこそねばたまの夢に見えつつ寝ねらえずけれ

(万・四・六三九)



勝鹿の真間乃手兒奈我麻衣に青衿着け直さ麻を裳には織り着て髪だにも

搔きは梳らず履をだに穿かず行けども錦綾の中につつめる齋兒も妹に如かめや

和伎毛故我如何に思へかぬばたまの一夜もおちらず夢にし見ゆる

葦垣の外にも伎美我寄り立たし恋ひけれこそば夢に見えけれ

（万・九・一八〇七）

（万・十五・三六四七）

（万・十七・三九七七）

などがある。要するに、上代では、「が」が主格を示す場合、それを承ける述語はそこで終止せず、必ず未然形か已然形を取って条件句を形成していた事になる。但し、ここで、左に記すように、三つだけ例外が見られたので触れておきたい。

1 千鳥鳴く佐保の河門の瀬を広み打橋渡す奈我来と思へば

（万・四・五二八）

この歌は通釈すると、「千鳥の鳴く佐保川の川門は瀬が広いので打橋を渡します。あなたが通って来ると思うので」の意となる。よって、第二人称の代名詞「汝」を受けた主格を示す「が」は、動詞の「来」に係っている。ところで、「来」は、カ行変格活用動詞「来」の終止形である。つまり、この場合、主格の「が」は、用言の終止形に係っていることになるから、先述した幾つかの例と異なり、例外であると言える。

2 秋づけば時雨の雨降りあしひきの山の木末は紅にはひ散れども橘の

成れるその実は直照りに彌見我保之久み雪降る冬に到れば霜置けども……

（万・十八・四一一一）

右の長歌の例では、上一段落活用動詞「見る」の連用形を承けた、主格を表わす「が」が、「欲し」という形容詞の連用形に係って中止法として使われている。したがって、これも先述した、未然形又は已然形に係って行く主格の「が」の用法とは異なるわけであるが、ただ、上代に於ては、「見が欲し」という語が頻繁に見られ、一種の熟語のようにして用いられていたようである。よって、これは、主格を示す「が」の用法の例外と見るよりも熟語で

あるが故に、例外と見られるにいたったものと解釈した方がよいように思う。

3 わが門の五株柳何時も（母が恋ひすす）於母加古比須々業ましつつも  
（万・二十・四三八六）

この歌では、母を承けた主格の「が」が「恋ひすす」に係っている。そして、この「恋ひすす」は「恋しつつ」の意で、ス（為）の終止形を重ねた形と言われるから、「が」は終止形に係って行くように見える。しかし、この歌は防人歌の一首であり、東国方言の一つと考えられる「恋ひすす」は、他に類例が少ないところから、はっきりと終止形を重ねた形とは言い兼ねる現状である。つまり、この例も、主格「が」の用法の例外と見るよりも、「恋ひすす」が不明であるがための例外と考えた方がよさそうである。

以上述べたところから、注意すべき例外は、初めに上げた巻四の歌一つとしか考えられない。よって、上代では、主格を表わす「が」が、その用法に於て、現代と大いに異なり用言の未然形、又は已然形に係っていたという事が言えそうである。それでは、次に、係体言主格の「が」について考察した結果を述べてみることにしよう。

#### (ハ) 係体言主格

この例は、各作品とも、連体格を表わす「が」に続いて多く見えている。それぞれの作品から何例かずつ左に記してみると、

沖つ鳥鴨著く鳥（我が率獲し）に和賀韋泥斯妹は忘れじ世のことごとく  
（記・上・神代）

真玉如す阿賀母布伊毛（言が思ふ母）  
（記・下・安康）

みつみつし俱梅能故選銀垣本に植多し椒（来目の子らが）  
（紀・三・神武）

大和辺に瀾我保指母能婆……（見が欲しものは）  
（紀・十五・清寧）

馬（わが）ないたく打ちてな行きそ目ならべて見ても和我婦志賀（わが）にあらなくに

（万・三・二六三）

吾背子我（わが）着る衣薄し佐保風はいたくな吹きそ家に至るまで

（万・六・九七九）

たらちねの母我養蚕（母が）の繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして

（万・十二・二九九一）

君我由久道（君が）のながてを繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも

（万・十五・三七二四）

和我保里之雨は降り来ぬかくしあらば言举せずとも年は栄えむ

（万・十八・四一二四）

彼等我惑心（彼等が）をば教へ導きて……

（宣・三五）

天之益人等我過（天の益人等が）ち犯しけむ雑々の罪事は……

（祝・六月晦大祓）

いずれも、これらの例では、主格を示す「が」が、下に来る用言には係らず、その用言を承けた体言に係っている。乃ち、一番初めの例で見ると、第一人称の代名詞「我」を承けた主格の「が」は、「率寝し」という語の下に来る「妹」に係って、「私の寝た妹」の意になっているのである。以下、同じようにして考えられ、結局、この、体言に係って主格を示している「が」は、現代語の「の」に置き換えることの出来るものと言える。

ところで、この種の主格の「が」には、右に並び上げたような、「が」の係って行く用言と、それに続く体言が明記されたものの外に、左のようなものも入れておいたので、ここに記しておくことにしたい。

まず、その第一は、用言を承ける体言が省略されて記されていないものである。

葦原の密（し）しき小屋に菅畳いやさや敷きて和賀布多理泥（我が二人寝し）ス

（記・中・神武）

右の古事記歌謡の例は、神武天皇が伊須気余理比売に向かつて歌われたもので、文末の「二人寝し」の下に、伊須気余理比売をいとしがって呼ぶ「そなた」とか「あなた」とかという語が略されていると考えられる。乃ち、この

部分を訳せば、「私が一人で寝たそなたよ」というような、感動を含んだ言い方になろう。又、次の、万葉集の例では、文末に「もの」などの体言が略されていると考えられる。

橘は花にも実にも見つれどもいや時じくになはし（見が欲し）見我保之

（万・十八・四一二）

乃ちこの歌は、「橘は花の時も実になってからも觀賞したけれど、いよいよいつでも見たいよ、ものだ」の意になり、やはりこの場合も、余情をこめた表現になっていると言えよう。

右に記した二例のように、用言の連体形を承けるべき体言が省略されて記されていないものは、当然、この係体言主格のグループに入れるべきものなので、入れておいた。

次に、万葉集だけに見られたものだが、主格を示す助詞「が」の係って行く述語が、係結びの結びの語に当たっているものがある。

家に行きて如何にか阿我世（言がせむ）武枕づく妻屋さぶしく思ほゆべしも

（万・五・七九五）

夕されば日ぐらし来鳴く生駒山越えてそ安我久流妹が目を欲り（言が来る）

（万・十五・三五八九）

草枕旅にしばしばかくのみや君を遣りつつ安我孤悲乎良牟（言が恋ひをらむ）

（万・十七・三九三六）

右に並び上げたようなものが、そのうちのほんの一例であるが、いずれもこれらは、係助詞の「か」や「や」「を」承けた結びの用言がそのまま主格を示す「が」の係って行く語ともなっているのである。そして、それぞれ、「家に行ったところで私は何としようか」、「夕方になるとヒグラシが来て鳴く生駒山を越えて私は行くことよ」、「こうししばしばわが君を旅に行かせて私は一人で恋しく思っているのでしょうか」の意になり、主格を表わす「が」は、用言の下に、心もち略されているように感じられる体言に係って、全体として、余情を含んだ言い方になって

いることがわかる。そこで、これらの例でも、「が」は意味的には、用言を承けた体言に係って行くものとして、係体言主格のグループに入れてみた。

最後にもう一つ、このグループに入れたものとして、主格の「が」がク語法に係って行くという例がある。これは、祝詞を除く四つの作品に幾例かずつ見られたが、ここでは、万葉集から一つ例を取り上げて説明してみよう。

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむと和（わが思はなくに）我不念久余（わが思はなくに）

（万・三・二四二）

この歌では、第一人称の代名詞「我<sup>わ</sup>」に続く助詞の「が」が「思はなく」という語に係っている。ところで、「思はなく」は、ク語法で解けば、「omofanu+aku→omofanaku」となる。この場合、「aku」はいわゆる「あくが」の「あく」で、所とか事の意であるから、体言である。つまり、直訳すれば、「思はなく」は「思わないこと」の意であり、主格を示す助詞の「が」は、体言の「こと」に係っていることになる。よって、ク語法が下に来た場合の助詞の「が」も、当然係体言主格の意味を持つものと考え、このグループに入れておいた。

以上述べたように、記されているはずの体言が省略されて書かれていないもの、係結びの結びと主格「が」の述語が一致しているもの、「が」がク語法に係っているものの三つを、係体言主格を示す「が」のグループの中に含ませておいたので、一応断わっておく。

いずれにしても、この係体言主格の「が」は現代でも盛んに耳にするものであるが、既に上代でも、いろいろな形で、頻繁に使われていたという事が言えよう。それでは、最後に上代で見られたもう一つの大きな意味グループである賓格の「が」について述べてみたい。

## (二) 賓 格

これは記紀の両作品では見られなかったが、万葉集や宣命、それに祝詞では、全体の1割前後の例が見えていた。

左に幾つかその例を掲げてみることにしよう。

天地の遠我如日月の長我如押し照る難波の宮にわご大君……

(万・六・九三三)

故郷は遠くもあらず一重山越我可良余思ひそわがせし

(万・六・一〇三八)

君我牟多行かましものを同じこと後れて居れど良きことも無し

(万・十五・三七七三)

この時雨いたくな降りそ吾妹子に美勢牟我多米余黄葉取りてむ

(万・十九・四三二二)

悔しと念賀故仁今此の藤原惠美朝臣の大保を……

(宣・二六)

本忌之可如久方忌まずして……

(宣・三八)

四方の国を安国と平らけく知食我故に……

(祝・祈年の祭)

右に記したようなものが、資格の例であるが、これらは、いずれも、「が」そのものに意味がない。この場合「が」は、「ごとく」、「からに」、「むたか」、「ために」、「ゆえに」など形式語に続いてその補語を作っている。これは、先の連体格や主格の「が」とは意味的に違うので、ここで新たに資格を示す「が」という一グループを作ってみたわけである。尚、この資格の「が」は、先述したように、上代でもそんなに多く使われているわけではないが、現代となると、全く用いられていないことを付記しておきたい。

以上で、上代に於ける助詞「が」の意味についての考察を終了する。続いて、中古の文学作品について、考察の結果のあらましを述べてみることにしよう。

### 三 中古 (平安時代)

この時代の代表文献として取り上げたものは、物語文学のうちの、竹取物語(竹)、伊勢物語(伊)、大和物語(和)、

源氏物語（源）、日記文学の中から、土左日記（土）、更級日記（更）、それに歌集として、古今和歌集（古）、更に、歴史物語の大鏡（大）、もう一つ、説話文学の今昔物語（今）という以上九作品である。これらの作品について、以下、前の上代と同じように、用法・接続・意味の順で述べて行くことにしよう。

① 用法

この、用法については、特別に問題とすべき点はない。乃ち上代と同じく、助詞の「が」は、普通の地の文に用いられているのは勿論のこと、歌にも、会話文にも、何らの制限を受けることなく、自由に使われているのである。

② 接続

助詞「が」の用例数が、わずか21例しか出て来ない土左日記に於ても、四〇〇〇以上の老大な例が出て来る今昔物語に於ても、共通して言える事は、上代と同じく、体言を承ける「が」の例が圧倒的に多いことである。どの作品でも、7・8割は体言+「が」という承接関係のものであり、中でも、第一人称の代名詞「我」を承ける「が」が、かなり多い点など、上代の場合と余り変わりがない。

「が」が用言に接続する際、その用言が連体形を取って体言的に用いられている事も、上代で既に見られた現象であるが、ただ、上代に比して、「り」・「たり」・「つ」・「る」・「らる」・「べし」・「けり」・「なり」など、助動詞を承ける例がかなり多く、又、変化に富んで来ていることが目立つ。

それから、新しい承接関係としては、「が」の、助詞を承けた例が出来る。この一番古いものは、左に記す土佐日記の例であるが、ただこの場合、「し」を助詞と取るか否か問題である。

一文字をだにしらぬものし。が。あしは十文字にふみてぞあそぶ

（土・廿四日）

右の例では、「し」を間投助詞と取る説の外に、代名詞の「其」と考えるもの、「ものし」と続けて、「物師」又

は「巫女の類」の名詞と見るもの、「然（しか）」で、「こんなに」の意とする説などがある。「し」の取方によって、「が」が主格を表わすか、連体格の助詞になるかという意味の問題にまで及ぶわけであるが、現在のところは、他に類例が見当たらないところから、不明と考えるより外にないと思う。「が」の、助詞を承ける確かな例が出て来るのは、この土左日記より約一世紀後に成った源氏物語や大鏡、それに今昔物語の中である。しかし、これらはほんの数例であり、しかも左に記すように、その助詞は、「など」「ばかり」「の」「と」という四つだけに限られている。

四年ばかりが、このかみにおはすれば……

（源・紅葉賀）

女のが並ばぬこそ……

（源・葵）

御髪すくななるなどがかく誇らはしきなりけり

（源・少女）

伊尹・兼通・兼家などがいひもよほして……

（大・三ノ師輔）

講のなからばかりがほどに……

（大・六ノ昔物語）

「君ト我<sub>レト</sub>、年来ノ睦ビ……

（今・十ノ三）

廿町許<sub>ガ</sub>程ニ……

（今・二十五ノ九）

京ノガ<sub>見ケム</sub>ハ……

（今・三十ノ四）

これら四つの助詞は、品詞分類上から見れば、完全に助詞に属するが、その用法は極めて体言的である事が、右に記した例文からわかるであろう。要するに、平安時代にはいると、助詞の「が」は、先の上代に比べて、かなりいろいろなものに承接しており、それだけ用法範囲が広がって来てはいるが、その承接しているものは、必ずず体言又はそれに準ずるものである点で、先の上代と大して変わったところはないと言えよう。そして又、この、助詞の「が」が、体言又はそれに準ずるものを承けるといふ現象は、「が」が格助詞である点から考えれば当然のこと



と思われる。

③ 意 味

上代に見られた四つの大きな意味と、この中古で新たに出来た逆接の「が」について先に上げた順に従い、述べてみることにしたい。

尚、上代では、意味決定のためもあり、一つ一つ例を上げて詳しく説明して来たが、中古以後は、これまで出て来たものと同じ用法のものは、いちいちその例を上げて説明することを省略し、問題となるべき点についてのみ述べて行きたいので、一応その旨断わっておく。

(イ) 連 体 格

上代でも盛んに用いられていた連体格の助詞「が」は、中古にはいつても、竹取物語から今昔物語まで、一貫してどの作品でも50%前後の使用率を示し、如何に豊富に使われていたかを物語っている。ただ、上代に比べて目立つ点は、君、我、汝など、人称代名詞を承けた連体格の助詞「が」の例が、大變に多くなって来ていることである。「が」が、中古にはいると20%以下に減り、一方、代名詞、特に人称代名詞を承ける連体格の「が」の例は、上代では大体50%平均で現われているが、中古になると各作品実に80%前後の高率を示すようになってしまふのである。これは、先に上代の項で述べたように、現在の連体格助詞「が」の用法の一つとして、人称代名詞を承けるものが残存している事を思い合わせれば、既にこの中古で、連体格の助詞「が」の用法が、現在のそれに一步近づいて来たものと考えていいのではないだろうか。

尚、人称代名詞を承けた「が」と共に、現在、残存している連体格の助詞「が」のもう一つの用法として、地名

に使われているものも、少数例ではあるが、上代に引き続き、この中古で、時代的に大差なく見えていた。

それから、前に上代の連体格の項の最後の所で述べた、用言の連体形と形容詞の語幹に接尾語「さ」がついた形とを結んで、全体として感情をこめた言い方になっている、特殊な連体格助詞「が」も、先の上代に続き、この中古に於て、盛んに使われている。ただ、上代ではこの形式のものが必ず歌の末尾に見えていたのに、中古も半から末にかけての源氏物語や大鏡、今昔物語になると、左に記す如く、文の途中でも使われるようになってい

「親たちのいと事々しう思ひ惑はるるが心苦しきさにかかる程を見過ぐさむとてなむ

（源・葵）  
（源・浮舟）

「いみじく物思ふなるが心苦しきに近う呼びよせてと思ひ侍る

そのみやの辺の人にえあひ侍ぬがくちをしさにこころあつまり給へるなにも

（大・五ノ藤氏物語）

しおはしますやらんとおもふたまへてかつはかく申侍ぞ

（今・四ノ六）

忽ニ流レヌベ。糸惜サニ寄テ女ノ手ヲ捕ヘテ曳上グ  
思ヒ不懸ズ此ク御タル。喜サニ手迷ヒヲン 出来タリ

（今・二十二ノ七）

彼ノ女ノ否不歩ガ。不審サニ彼ノ云ヒ伝フル女ノ家ニ……

（今・二十七ノ十六）

右の例でわかるように、これらもやはり歌の末尾に使われた場合と同じく、意味的には「が」の前に述べた事項に対しての感想を、「が」の後の形容詞の語幹+接尾語「さ」という形が同格のようにして述べているという事になる。ただ、歌の末尾に使われた場合に比べて、右のように、文の途中に用いられた場合には、同格の意が、いちだんと強くなっているように感じられることを、注意しておきたい。

さて、以上の連体格の助詞「が」の例は、すべて、既に上代でも現われた意味用法ばかりであるが、ここで、これまでに見られなかった新しい用法が一つ出て来たので、それについて説明してみよう。それは、古今集と源氏物

語の二作品に見られたものであるが、「が」の下に来るはずの体言が省略されて記されていない、いわゆる準体言の「が」である。

このうたはある人のいはくかきのもとの人まろがなり

（古・十三・六七二）

この哥はある人のいはく大伴のくろぬしがなり

（古・十七・八九九）

「かれはたれがぞ

（源・賢木）

「誰がぞ

（源・胡蝶）

「わがぞ

（源・竹河）

右の古今集の二例は各々「が」の下に歌という体言が略されており、源氏物語の方の三例では、物、事などの体言が省略されていると考えられる。これは、上代では見られなかった新しい用法である。しかし、古今集の二例は全く同じような使い方であるし、源氏物語の三例も、会話文に用いられていて、後に指定の終助詞「ぞ」を伴うことで共通している。

要するに、この準体言の「が」は、中古で初めて現われたものには違いないが、その用法は極めて限られていて、特殊なものであったということが言えよう。尚、ついでに言えばこれらの例は、現在では、

この歌はかきのもとの人まろのだ

「誰のだ。」

というように、「が」の代わりに「の」が使われている。

以上で、中古に於ける連体格の助詞「が」についての考察を終了する。続いて、主格助詞「が」に関する調査結果を述べてみることにしよう。

(四) 主 格

参考にした中古九作品のいずれに於ても、この、主格を表わす助詞「が」は、全用例数の一割にも満たず、その使用率は極めて低い。

ところで、上代では、主格を「が」が示す時、その述語は未然形又は已然形を取って条件句を形成していたが、中古でも、主格の「が」は、ほとんどこの用法のものばかりである。ただ、この時代になると、新たに、主格助詞「が」の、終止形に係って行く用法が見られる。しかし、これはほんのわずかであり、しかもその確実な例は、中古も末期の今昔物語にならないと現われて来ない。その前に竹取物語、大和物語、源氏物語の三作品で、この、主格助詞「が」が用言の終止形に係って行くという例が出ては来るが、いずれもこれらは異文があり、確実なものとして取り上げるまでには至らないのである。

さて、今昔物語であるが、ここには、主格を示す助詞の「が」が計131例見られる。そのうち約74%に当たる97例は、未然形又は已然形に係って行くものであるから、ここでは一応問題から外しておくこととしたい。

ところで、問題となる残りの34例であるが、よく見ると、これらは、主格を表わす助詞の「が」が、用言の終止形に係って行く用法には違いないが、それは、ただ単に、「が」が終止形に係っているというものではなく、意味的、形式的に眺めた場合、必ず次の二つの用法のいずれかに属していると考えられるのである。以下その各々の用法について、例を上げながら説明してみることしよう。

まずその第一は、主格を表わす助詞「が」の前に、必ず、その主格に更に説明を加える文が、助詞の「の」を用いて付記されているものである。左にわかりやすく例を上げて説明してみよう。

年五十許ナル男ノ怖シ気ナルガ、水干装束シテ打出ノ大刀帯タリ。 (二十六ノ十八)

右の例では、形容動詞「怖シ気ナリ」の連体形「怖シ気ナル」を承けた主格を表わす助詞の「が」が、文末の完

了の助動詞「タリ」に係っている。つまりこれは、明らかに、主格助詞「が」の、用言の終止形に係って行く例という事になる。ところで、この場合、「怖シ気ナル」と主格助詞「が」の間には、「男」という体言が略されていると考えられる。そして、その「男」はどのような「男」なのかというと、「年五十許ナル男」なのである。つまり、この文では、「怖シ気ナル男」という主格に更に、「年五十許ナル男」という説明が、助詞の「の」を介して加わっているのである。この助詞の「の」は「一たんそこで」「これこれだ」と指定し、更に下に続けているので、指定格の「の」と呼ばれる。尚、ついでに言えば、この指定格という格は、今問題としている「が」助詞のものにも見られるが、それは次の係体言主格の項のところで説明したい。要するに、この部分、現代語では「年五十ばかりの男で、おそろしそうな男が……」となる。そして、このような「が」の用法は現在では

年五十ばかりの男でおそろしそうな男（人又はの）が、やって来た

として、必らず、主格助詞「が」の前に、体言又はそれに準ずるものを挿入して使っている事を付記しておく。いずれにしても、このように、主格助詞「が」が終止形に係ってはいないが、必らずその前に指定格の「の」が来ているという形式のもの、この今昔物語に全部で8例見られたので、参考までにそのうちの幾つかを左に掲げておくことにしよう。

薄打ッ者ノ妻ノ女ノ年卅餘四十許ナリケルガ、此ノ阿闍梨ノ房ニ来タリ。

(二十ノ六)

年十三四許有ル若キ女ノ薄色ノ衣一重濃キ袴着ガ、扇ヲ指隠テ片手ニ高坏ヲ取テ出来タリ。

(二十二ノ七)

灰毛斑ナル猫ノ長ケ一尺余許ナルガ、眼ハ赤クテ虎珀ヲ磨キ入タル様ニテ大音ヲ放テ鳴ク。

(二十八ノ卅一)

亦大指ノ大サ許ナル物ノ黄黒バミタルガ、長三寸許ニテ三切許打丸カレテ入タリ。

(三十ノ一)

次に、主格助詞「が」が終止形に係って行く場合のもう一つの定まった用法というのは意味的に見て、逆接が混

入していると思われるものである。これもまず、左に簡単な例を上げて説明してみることしよう。

「我レハ多ノ年ヲ経テ此ノ所ニ有ツルガ、愛欲ノ心オコス事无シ。」  
（十三ノ十二）

右の例では、完了の助動詞「ツ」の連体形「ツル」を承けた主格を表わす助詞の「が」が、文末の「无シ」という形容詞の終止形に係っている。つまり、主格助詞「が」が用言の終止形に係って行く用法という事になるが、ただ、意味的にもう少し詳しく眺めてみると、この「が」には、主格と共に逆接の意も混じっていると考えられる。要するに、全体を訳してみると、この文ではまず、「有ツル」と「が」の間に「我レ」という語が略されており、しかも、「が」の前までを一つの独立した文として切って考える事が出来るので、「私は多くの年を経てここにいた。（ところがその私が）愛欲の心を起こすことがなかった」というように、「が」に「ところが」という逆接の意味を含ませて考えることが可能なのである。そして現在では、このような場合

私は長年ここにいたが、愛欲の心を起こすことがなかった

となり、この「が」を、接続助詞として取り扱っている。しかし、今昔物語のこの例では、「が」を接続助詞と取るのはまだ早過ぎるようである。というのは、この文では「私は多くの年を経てここにいた。（その私が）愛欲の心を起こすことがなかった」として、別に「が」に逆接の意味をわざわざ含ませなくても解釈出来るからである。「が」を接続助詞と取らざるを得ないような例については後の逆接の項のところで詳述したい。いずれにしろ、このように主格助詞「が」が用言の終止形に係って行く用法であるには違いないが、「が」そのものに逆接の意味がはいっているとも考えられるもの、今昔物語に全部で26例出て来たので、左にもう少し例を上げておくこととしよう。

此ノ乗タル馬走り早マリテ鹿ノ如ク既ニ可落キガ、四ノ足ヲ同所ニ踏テ少シ指出タル巖ノ崎ニ立ニタリ。  
（ところがその馬が）  
（十一ノ三十）

木共ヲ横様ニ結付テ置ルガ、何ニカシム俄ニ繩ノ切レテタレフシタル五位ノ上ヘニ落懸ル。  
（ところが、その木共が）  
（十九ノ三十九）

季通モ臥タリケルガ此ヲ聞テ起テ物打着テ奇異ト思居タリケリ。  
（ところが、その季通が）

（二十三ノ十六）

「彼ノ家ニハ若キ娘ノ候ケルガ日來煩テ此ノ昼方既ニ失候ト  
（ところが、その若い娘が）

（二十七ノ十九）

水銀商ハ浅黄ノ打衣ニ青黒ノ打符袴ヲ着テ練色ノ衣ノ綿原ナル三ツ許ヲ着テ菅笠ヲ着テ草馬ニ乗テゾ

有ケルガ、辛テ、迺テ高キ岳ニ打上リ。  
（ところが、その水銀商が）

（二十九ノ三十六）

此ノ前ニ行タリケル男ハ返ケルママニ「心地悪」ト云テ臥ニケルガ二、三日有テ死ニケリ。  
（ところが、その男が）

（三十一ノ十五）

以上記したように、平安時代も末期の今昔物語になると、主格助詞「が」が、用言の終止形に係って行くという用法が見られるが、それは、ただ単に終止形に係って行くという現在の用法とは異なり、二つの決まった用法に分けられる事を指摘しておきたい。尚、これら二つの用法に共通して見られる現象は、「が」が必ず、用言の連体形を承けているという事である。結局、体言を承けた主格助詞の「が」はすべて上代同様、未然形又は已然形に係って行くものばかりで、終止形に係って行くものは、中古になっても未だに現われていないという事になる。それは続いて係体言主格の「が」についての考察の結果を述べてみることにしよう。

(ハ) 係体言主格

中古でも、この係体言主格の「が」は、各作品20〜30%の使用率を占め、量的に見れば連体格の「が」について多く使われている。内容的には、主格を示す助詞「が」の係って行く体言が明記されたごく普通の用法のものを初めとして、先に上代の項で特殊な用法として上げた、「が」の係って行く体言が省略されて記されていないもの、係結びの結びに当たる部分の述語と、主格助詞「が」の係って行く述語が一致するもの、主格を示す助詞「が」がク語法に係って行くものという三つの用法が、上代に引き続きこの中古でも、時代的に大差なく用いられている。

ただ、この時代になると、意味的に見て、今まで見られなかった新しい用法のものが二つ出て来るので、次に、それについて説明を加えてみたい。

まずその第一は、同格の「が」である。これは、先に(イ)の連体格のところでも述べた、「見るが、わびしき」、「思ひ惑はるるが、心苦しき」など、用言の連体形十「が」十形容詞の語幹十接尾語「き」という形が発展したものと考えられる。ところで、この意味に取つてもいいと思われる最初の例は、竹取物語に出て来る。

「さらずまかりぬべければ思しなげかんが悲しき事をこの春より思ひなげき侍る也  
(九)

右の例では、推量の助動詞「む」（原文表記「ん」）の連体形を承けた主格助詞の「が」が「悲しき」という形容詞の連体形に続く「事」という体言に係っている。つまりこの「が」は、係体言主格の「が」という事になるが、しかし、意味的に見た場合、普通の係体言主格の「が」とはいささか異なっている。乃ち、先の連体格のところでも来た「見るが、わびしき」などと同じく、ここの「が」は、前の「思しなげかん」事に対する感想を、「が」の後の「悲しき事」が述べているというように考えられる。

ただ、連体格の場合には、「見る事がわびしいよ」というように、感情を含んだ余情表現になっていたが、この場合は、「お思い嘆くことの悲しい事を」となって、むしろ、「思しなげかん」と「悲しき事」が同格である事を強調して述べているように思われる。

このように、「が」の前の事項に対する感想を「が」の後の形容詞、又は形容動詞が同格のようにして述べているものを、以下、同格の「が」と名づけて考えてみたい。

尚、この同格の「が」は現在では、助詞の「の」などにとって代わっているが、中古では、左に記す如く、竹取物語以後も平均してかなり多く見えている。



何心なくうちぢゑみなどして居給へるがいと愛しきに……

（源・若紫）

「語る人もなきが、いみじういぶせくもあるかな

（源・柏木）

「今しも人のをこせたるが、あはれに悲しきこと

（更・野辺の笹原）

「まいり侍りにけるが、うれしき事

（大・一ノ序）

「カカル者ヲバ助クルガ、吉キ也

（今・五ノ十九）

ヤサシク手ヲ被<sup>チ</sup>斬ルガ、弊キ也

（今・十ノ二十九）

別レ申シナムズルガ、悲キ也

（今・二十六ノ七）

驚ヲ思ヒ懸ルガ、極テ愚ナル也

（今・二十九ノ卅三）

もう一つ、この意味グループの中で特殊な用法として考えてみたのは、前に(四)の主格のところ、一寸触れたが、指定格の「が」というものである。これは、いったん「これこれだ」と指定したあと、更に説明を加えるもので、現代語の「で」に置き換えて考える事が出来ると思う。有名な、源氏物語の書き出しの部分に出て来る「が」などは、典型的な指定格の例として考えられよう。

いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり（桐壺）

右の例では、打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」を承けた主格を示す助詞の「が」が、「時めき給ふ」の下に略された「人」とか「方」という体言に係っている。乃ち、係体言主格の「が」という事になるが、意味的に見るとこの部分は、「位が高く勝れた身分ではない方で勝れて時に逢って栄えなさる方があったのであるよ」となり、「が」は、先に主格の所で述べた今昔物語の「年五十許ナル男ノ怖シ気ナルガ水干装束シテ……」という例の「ノ」と同じく、指定格を表わしていると考えられる。そして、この指定格の「が」も左に記す如く、中古の作品では平均してかなり多く見えている。

この男の物などいひけるがいひやみにけるぞそが中にをりける  
友達たりけるが物のゆへ知りたりけるをぞ呼びにやりて……

(和・附・二)  
(和・附・二)

高麗の紙の薄様だちたるがせめてなまめかしきを……

(源・梅枝)

継母なりし人は宮仕へせしが下りしなれば……

(更・梅の立ち枝)

「北方にておはせしがのちには六条の左大臣どのの御子の右大弁のうへにておはしけるは四の君とこそは

(大・三、師輔)

大キナ鼠ノ金ノ色ガ 三尺許ナル出来テ……

(今・五ノ十七)

「娘ノ年十五六ナル 形美麗ニシ 未ダ不嫁ザル 撰ビ定メテ……

(今・十ノ卅三)

本ハ侍ニテ有ガ 盗ジテ獄ニ居テ後放免ニ成ル 若也ケリ

(今・二十九ノ廿二)

以上記したように、この係体言主格という意味グループには、中古になると、同格、指定格という二つの新たな用法が現われた事を注意しておきたい。尚、これら二つの用法はいずれも「が」が用言の連体形を承けた時にのみ起こるものであることを追記して、続いて賓格の「が」について述べてみることにしよう。

### (二) 賓 格

上代ですらそれ程多く使われていなかったこの賓格の「が」は、中古でも各作品その使用率は極めて低く、平均10%にも満たしていない。しかも、その用法を見ると、「が」が、形式語のうちでも、「ごと」と、又は「ごとし」に続いて行くのが圧倒的に多く、如何にその使用範囲が狭ま<sup>ま</sup>って来たかを物語っている。

ただ、和漢混淆文の今昔物語では、他の和文体の作品に比べて、この賓格の「が」が、質量共に割合豊富に用いられている事が目立つ。結局、この賓格の「が」は、既に中古に於て、漢文体の世界の語法としてほとんど一般には使用されなくなつて来たという事が言えるのではないだろうか。それでは、意味考察の最後に、逆接の意味に取

れる「が」について述べてみることにしよう。

(4) 逆接

上代では全然用いられていなかった逆接の「が」は、中古でも、大和物語、大鏡、今昔物語のわずか三作品に見られるに過ぎない。

まずこの中で時代的に一番古い大和物語を見ると、次のような、逆接の意味としか考えられない例が出て来る。

又釣殿の宮に若狭の御といひける人を召したりけるが、又も召なかりければよみてたてまつりける

(十五)

この文を現代語に訳すと、「召したりける」の主語が陽成院であるから、「又、陽成院が綏子内親王の御殿で若狭の御という女房を呼んでお逢いになったけれど、もそれっきりで再びお召しかなかったから若狭の御は歌を詠んで奉った」となる。つまりここでは、助動詞「けり」の連体形「ける」を承けた「が」が、明らかに、「けれども」とか「ところが」の意を持つ接続助詞として使われている。しかも、この文では「が」の後に「召なかりければ」という既定条件が来ているのだからますます、「が」は「けれども」の意を持った接続助詞、乃ち、逆接の意味を有する助詞という感が強くなる。それで、これこそ一番初めに現われた逆接の「が」として考えたいが、残念ながらこれには異文が存するので、確実な例として取り上げるまでには至らない。乃ちこの部分、御巫本及び鈴鹿本では「が」が省かれ、「召したりける」で文がいったん切れているのである。よって、この「が」を逆接の意味を有した例として、俄かに信用する事は出来ない。しかし、御巫本及び鈴鹿本は大和物語の伝本中それ程善本ではない反面、かなりの善本と目されている為家本や拾穂抄本では、この部分が明らかに「が」と記されている事を考え合わせると、この「が」を、逆接の例には、はいらないとして全く無視してしまうわけには行かないであろう。

次に、この大和物語から約半世紀後に成ったのではないかと言われている大鏡では、逆接の意味に取れる「が」

の例が、全部で5つ見えている。このうち3例は異文が存するので確実な例とは言えないが、次の2例は、大鏡の二大伝本である六巻東松本でも、八巻流布本でも、明らかに「が」と記されているので、逆接の意味を有するものとして考えてよいと思う。まずその第一は

賀縁阿闍梨とまうす僧のゆめにこの君だち二人おはしけるが、あに前少将いたうものおもへるさまにて  
この後少将はいと心地よげなるさまにておはしければ……

（大・三ノ伊尹）

という例である。右の文中、問題となる部分だけを訳すと、「この君達お二人がいらつしやったところ、が、兄の前少将はひどく憂を含んだ様子にお見えなさり……」となるから、この場合、助動詞「けり」の連体形「ける」を承けた助詞の「が」は、逆接の接続助詞として用いられていると考えられる。それから

源大納言重光卿御むすめのはらに女君二人男君一人おはせしが、この君たちみなおとなび給て女ごみ  
たちはきさきがねとかしづきたてまつりたまひしほどに……

（大・四ノ道隆）

という例では、「姫君がお二人男君が一人いらつしやいましたところ、が、この御子様達は皆御成人なさいまして……」というように訳せるので、ここでも、過去の助動詞「き」の連体形「し」を承けた助詞の「が」は、逆接の意味を有する接続助詞として使われていることになる。

さて、以上、大和物語、大鏡の二作品に見られた計3例の「が」を、一括して、「けれども」とか「ところが」と訳せるからとして逆接の意味を有する接続助詞であるとして見て来たが、次の今昔物語の考察を行なう前に、まずこれらを意味的にもう少し詳しく見て、各々の違いを明らかにしてみることとしたい。

まず、大和物語の例であるが、これは意味的に見て、明らかに逆接の「が」と考えられる。と言うのは、先にも一寸触れたが、「召なかりければ」という既定条件が「が」の後に見られるからである。一般に現代語などで「が」

が明らかな逆接の意と取れるものの一つに、「が」の後に予期したとと反対の既定条件が来ている場合があると思われる。

例えば、

風は吹いていたが、寒くなかったので出かけることにした

という文で考えてみよう。この場合の助詞「が」は明らかに逆接の意味を有する接続助詞である。そしてここでは、「風は吹いていた」という事実に対して、当然「寒い」ことを予期していたのに、「寒くなかったので」という既定条件が来ているのである。同様に考えると、大和物語の場合も、陽成院が「お召しになった」という事実に対して、「又召がある」事を予期していたのに、「召がなかったので」という既定条件が来ている事になる。よって、この場合の「が」は、明らかな逆接の意味を有した例と思われる。ただ、異文の問題があるので、あくまでも確実な例として取り上げるまでには至らないが……

ところで、大鏡の方の2例は、この大和物語の用法とは違い、わざわざ「が」を逆接の意味として考える必要もないと思われる。

乃ち、この場合の「が」は、ある文に続けて更に別の説明を加えるに当たり、そこで一呼吸入れてほとんど無意識に「が」と発したものと考えてよいのではないだろうか。そこでこの「が」は現代語にすると、「ところが」とか「けれども」という逆接風な訳語も可能であるし、又、「さて」とか「ところで」という単なる接続詞のように考えても訳せるのである。ただ、注目すべきなのは、この場合、「が」の前後の文章の主語が一致すること、そしてその主語が明記されている事である。例えば、大鏡の最初の文では、「この君たち」という「が」の前の主語と、「あに前少将」及び「この後少将」という後文の二つの主語が一致しているし、又、二番目の方の例文では「女

君二人男君一人”という「が」の前にある文の主語と、“この君たち”という後の文の主語が一致し、しかも各々明記されているのである。

先に、(ロ)の主格助詞「が」の考察のところ、用言の終止形に係って行く「が」の一つに、逆接の意味の含まれているものがある事を述べたが、その際、逆接の意味がはいっているにも拘わらず、「が」を主格助詞のまままで置いておいた。それは、あの場合、「が」助詞の結んだ二つの文の主語は一致しているのに、前文の主語が記されているのに対して後文の主語は必ず省かれて記されていなかったからである。つまり、主語、述語が明記されている完全なる二つの文をつないでいる「が」を接続助詞として、又、主語、述語が明記された文と、もう一つ、主語が省略されている、形式的には不完全な文とをつないでいる「が」を主格助詞として、それぞれ考えてみたので、ここに一応断わっておく事にしたい。尚、この逆接の意味を含んだ主格助詞「が」は、接続助詞「が」へ移って行く過渡期の状態のものと見てよいのではないだろうか。

さて、今昔物語に出て来る逆接の「が」であるが、これは、全部で12例見えている。うち3例は異文が存するのて確実なものとしては取り上げられない。残る9例のうち1例は大和物語に出て来た用法と同じく予期に反した既定条件を後文に伴ったものであり、又4例は大鏡に見られた用法の如く、「が」でつないだ一文の主語が一致し、しかも、各々明記されているものである。その外に、今昔物語では、新たに次のような、逆接の「が」が出て来る。それは、「が」が、二つの文章を結ぶという役目をしている事には変わりはないが、必ずしも、二文の主語が一致しているとは限らないものである。ただ、二文の主語が全く別のものであるのかと言うと、そうでもなく、この二つの主語はどこかつながりを持っていると言える。左に、例を上げて説明してみよう。

其鉄取ル者六人有ケルガ長也ケル者ノ己等ガドチ物語シケル次ニ「佐渡ノ国ニソソ金ノ花柴タル所ハ

有シカ」ト云ケルヲ……

（二十六ノ十五）

右の例では、「が」の前の方の文章の主語が「鉄取ル者六人」であるのに対して、後方の文の主語は、「長也ケル者」である。つまり、この二つの文の主語は一致してはいるわけではないが、ただ、「長也ケル者」は「鉄取ル者六人」の中の一人であるので、この二つの主語は全然関係がないというわけでもない。このように、「が」のつないだ二文の主語が、全く一致しているというわけでもないが、何らかのつながりを持っているもの、この今昔物語に、右の例の外に、あと二つ見られたので、参考までに左に記しておくこととしよう。

男子二人有ケル。兄ハ人ノ侍ニテ被仕ケリ

（二十七ノ卅三）

「夜前コソ其丸。彼丸ハ詣来テ私語仕リシガ、其等ガ家共ハ其々也」  
（兄は男子二人のうちの一）  
 （其等は其丸、彼丸を指す）

（二十九ノ七）

ところで、今昔物語には、他にもう一つ、逆接の意味にしか考えられない「が」が見られるが、これは、諸本「が」と明記しているとは言え、今までの用法とは違い、全く、特異なものであって、解釈に苦しむのである。ともかく、その例を上げてみよう。

今ハ昔、若キ女ノ有ケル。夏ノ比近衛ノ大路ヲ西様ニ行ガ、小一条ト云フハ宗形也（二十九ノ三十九）

右の文のうち、「女ノ有ケル」を承ける「が」は係体言主格の「が」として考えられるから、「行ケル」を承ける「が」が問題のものである。ところで、この「行ケル」を承ける「が」は、二つの文をつないでいるには違いないが、前方の文の主語が「若キ女ノ有ケル」であるのに対して、後方の文の主語は「小一条ト云フ」であるから、これら二つの主語の間には、直接に何の関係もない事になる。小一条とはこの場合宗像神社の事であるが、この宗像神社は、地理的に見て、近衛大路を西方に行ったところ、乃ち、左京に属していたと言われるので、結局、前文の

主語である「若キ女」が向かった、その目的地と後文の主語「小一条」とが関係あることになる。

つまり、この場合には、その主語同士は直接に何の関係も持たない二つの文を、「が」が結んでいる事になり、「が」そのものにはほとんど意味がないものと思われる。乃ち、二文を続けて記述するに際し、本当に無意識に、一呼吸入れて、「が」助詞を二文の間に挿入したものとしか考えられない。このように、ほとんど、その関係の薄い文章をつなぐという接続助詞「が」の用法が、新しくこの今昔物語で現われている事を、特に、指摘しておくことにしたい。

以上、この中古で新たに現われた逆接の「が」は、意味的、内容的に見て、必ずしも明らかな逆接の意を有していないものもあるが、便宜上、一括して、逆接というグループに入れてみたので、その旨、断わっておく。

それでは、これで中古に於ける助詞「が」の意味考察を終了し、続いて、中世前期（鎌倉時代）についての調査結果のあらましを述べてみることにしよう。

#### 四 中世前期（鎌倉時代）

この期の代表文献として選び出したものは、二大随筆作品である方丈記（方）、徒然草（徒）、それに歌集の新古今和歌集（新）、説話文学の宇治拾遺物語（宇）と十訓抄（十）、もう一つ、代表的な軍記物語として平家物語（平）という以上六作品である。

これらの作品から助詞の「が」を抜き出しこれまでと同じように、用法、接続、意味の三つの方面から考察を加えてみたところ、用法及び接続の両面に関しては、とりわけ注意すべき点も見当たらなかった。

乃ち、用法では、相変わらず「が」助詞が地の文、歌、会話のいずれにも、何らの制限を受けることなく自由に



使われているし、又接続では、体言を承ける「が」の例が圧倒的に多く、外に助動詞を承けるものが質量共に増し、助詞を承げる例も、わずかばかりであるが、出て来ること、すべて、前の中古の場合と同じである。

さて、意味の面を見ると、まず、中古の考察の際に見られた助詞「が」の五つの意味用法は、引き続き、この中世でも現われていた。

その外に、この時代になって新しく出て来たものは特別にないので、以下、先の中古で述べた順にしたがって、各意味グループ別に目立つ点などを概観してみることにした。

#### (イ) 連 体 格

参考にしたどの作品でも、この連体格の「が」は一番多く用いられ、各作品50%前後の高率を占めている。内容的には、これまでこのグループの中で特別なものとして上げて来た、人称代名詞を承ける「が」の例、地名に使われている「が」の例、用言の連体形と形容詞の語幹+接尾語「さ」という形を結んで全体として感情を含んだ言い方になっている「が」の例、それに、中古で新たに現われた準体言の「が」の例が、相変わらず、この時代になっても、使われ続け、全くその姿を消してしまつたものは、ひとつも見当たらない。

ただ、量的に見た場合、既にこの前の中古でも見られた現象であるが、人名又は人称代名詞を承ける連体格の「が」の例が、いちだんと多くなつて来ている事が目立つ。これは前にも述べた通り、連体格の「が」の用法が現代のそれに近くなつて来ている事を示すものと思われる。ところで、更にこの点で注意しておきたいのは、古来、人名又は人称代名詞を承ける「が」の例は、「の」に比べて、その人を卑しめるか、又は、その人に親愛の情を示すのに使われる場合が多いと言われているが、この時代になると、この時代になると、この考への明瞭に裏付けられる例が多く出て来る。例えば、宇治拾遺物語を見ると、

(二一〇)

「四条大納言のはめでたく兼久がはわるかるべきぞ」という例がある。これなどは、助詞「が」が「の」と対象的に人を卑しめる際に使われた例の一つとして取り上げることが出来る。

それから、もう一つ、量的に見て、この連体格の意味グループで目立つ点は、用言の連体形と形容詞の語幹十接尾語「さ」という形とを結んで、感情をこめた言い方になっている、同格の前身と思われる「が」の例が、非常に少なくなっている事である。乃ち、これは、宇治拾遺物語、平家物語、十訓抄の各作品に一例ずつ見られるに過ぎない。しかも、今昔物語と宇治拾遺物語を比べてみると、今昔物語でこの用法の使われていたところが、宇治拾遺物語では、全く別の書き方になっている例が出て来る。

忽ニ流レヌベキガキガ 糸惜サニ寄テ女ノ手ヲ捕ヘテ曳上グ

(今・四ノ六)

ただ流れにうきしづみ流レれレけレばレいレとレほレしくレてレよりレてレ手レをレとりレてレ引レわたレしレつ

(宇・一三ノ一四)

これは、果たして宇治拾遺物語の本文が、今昔物語の本文を手本にして書き変えられたものかどうかという問題が残るため、ただちに右の例から、この用法が使われなくなったとして片づけてしまうわけには行かない。しかし、いづれにしろ、この、用言の連体形十「が」十形容詞の語幹十接尾語「さ」という感情をこめた用法が、ほとんど使われなくなって来ている事は事実である。そして更に、現在この用法が全く用いられていない事から推すと、これ又、連体格の助詞「が」の用法が、現在のそれに近くなって来ていることを示す現象の一つと考えていいのではないだろうか。

## (四) 主 格

上代や中古では、その使用率が10%に満たなかったこの主格の「が」も、中世になると幾らか多く使われるよう

になり、平均10～15%の使用率を占めている。内容的には、主格助詞「が」が、用言の未然形又は已然形に係って行くという用法が相変わらず多く見えているが、特に、この意味グループに於て目立つ点は、今までと比べて、用言の終止形に係って行く例のふえている事である。先に、中古の考察のところで、主格を示す助詞「が」が用言の終止形に係って行く確実な例は、今昔物語で初めて出て来るが、その場合、助詞「が」の用法は、前方に別の説明文が、指定格の助詞「の」を介して付記されたものか又は、意味的に逆接の意がこめられたものいずれかに限られる事を述べた。中世になると、この二つの用法のうち、逆接の意味の含まれている「が」の例が、いちだんと多くなっている。乃ち、これを数字的に眺めてみると、今昔物語では、主格を示す「が」助詞131例のうち、26例が、逆接の意味の混入しているものであったから、百分率にすると、約20%余りになるが、中世の作品である宇治拾遺物語や平家物語、それに、十訓抄などでは、なんと、主格助詞「が」のうち、60～70%が逆接の意味をも含んだ例となっている。

このように、急激に逆接の意味を含んだ主格助詞「が」の例がふえている事は、先に今昔物語で出て来たように、必ずしも、「が」が用言の終止形に係って行く場合だけに限らず、左に記すように、この中世になると、「が」が已然形に係って行く場合にも、逆接の意味の混入している例が出て来るからである。

ある人のもとに生女房のありけるが、人に紙こひてそこなりける若き僧に「假名曆書きてたべ」といひければ、  
僧「やすき事」といひて書きたりけり（ところがその生女房が）

仲胤僧都その座にありけるが、「やや、胤、はやうつきたり」といひければ、わかき僧たち「いかに」と顔をまもりあ  
ひ侍けるに……（ところが、その仲胤僧都が）

（宇・二四ノ八）

其比入道相国福原の別業におはしけるが、同廿日摂津左衛門盛澄を使者にて門脇の宰相の許へ「存る旨あり、  
（ところが、その入道相国が）

丹波少将いそぎ是へたべ」との給ひつかはされたりければ……

（平・二）

豊後少将宗長木蘭地の直垂に折烏帽子で供奉せられたりけるが、「是は法皇の御幸ぞ、あやまちつかまつるな」との給へば……

（平・八）

有国砌に候けるが、少こはづくろひしたりければ、殿下御覽じやりければ指をさして上長押を見やりけり

（十・一）

為則、御車のしりに候けるが、「希有の童かな、かかる所にて御牛をば追ふものか」と言ひたりければ……

（徒・百十四）

いずれにしる、右に記したような逆接の意味の混入している主格助詞「が」は、先述した如く、「が」が主格助詞から接続助詞へと移行していく過渡期の状態のものと思われるので、この種の主格助詞「が」がふえているという事実は、結局、接続助詞「が」が、徐々に増加しつつあることを意味しているものと考えていいのではないだろうか。

ところで、もう一つこの意味グループで注目すべきなのは、用言の終止形に係って行く主格助詞「が」の中で、体言を承ける例が新たに出て来ている事である。そして、この場合、用言の終止形に係って行くという用法でありながら、これまでのように、「が」には逆接の意味が混じっているという事もなく、ましてや、前方に、指定格の助詞「が」を介して別の説明文が加わっているという事もない。ごく普通の現在用いられている用法と同じく、助詞「が」は、ただ単に主格の意味を有しているだけなのである。

菓一寸ちが、柑子三になりぬ。柑子三つが、布三むらになりたり。

（宇・七ノ五）

「兼康が、まいッて候。

（平・三）

ふみもツたる便女が、まいッて「五条大納言どのへ」とてさしあげたり

（平・四）

大のまなごどもが、千万いできて入道相國をちやうどにらまへてまだたきもせず

（平・五）

「介借が、申候。

（平・十二）

此詩は杜荀鶏が、臨江駅に宿て作りけり

（十・十）

右の例のうち、宇治拾遺物語の二例は、今昔物語では、

「蘗ノ筋一ツヲ取テ柑子三ニ成ヌ。柑子亦布三段ニ成ヌ。

（十六ノ二十八）

となつていて、主格助詞「が」が用いられていない事を付記しておこう。又、平家物語の例のうち、「候」に係つて行くものは、「候」が、終止、連体同形であるため、この「候」の下に、「ことよ」などの体言が省略されているとすれば、これを連体形とも見る事が出来る。したがつて、その場合、「が」は係体言主格の意味を有している事になるが、ただ、この種の言葉は、その使われた場面や時から推して、武士がきつぱりと自信を持つて言い切つた感が強く、むしろ、「候」は連体形であるよりも、終止形と見た方が適當と思われるので、終止形として考へてみた旨、一応断つておく。

いずれにしろ、右の例から、体言を承けた主格を示す助詞「が」が用言の終止形に係つて行くという用法が、やつと、この中世前期になつて出て来た事は事実であり、この用法が現在盛んに使われているところから推して、これ又、主格助詞「が」の用法も、連体格助詞「が」の用法と同じく、現在のそれに非常に近くなつて来ていることを示しているものと思われる。

#### (イ) 係体言主格

この意味を有すると思われる助詞「が」は先の上代、中古と同じく、連体格の助詞「が」に次いでその使用率が高く、各作品、平均20〜30%の割合を占めている。そして、今までこの意味グループの中で、形式的に分類して来た、「が」の係つて行く体言が略されたもの、係り結びの結びの語と、「が」の係つて行く述語が一致するもの、それに、「が」がク語法に係つて行くもの、という三つの用法、及び、意味的にこの前の中古で分けてみた、同格、指定格という二つの用法が引き続きこの時代になつても使われていて、これまでと大した変わりはない。

ただ、量的に見ると、「が」の係って行く体言が省略された例の激増している事が目立ち、一方、同格、それに指定格の意味を持つ「が」は、中古に比べてずっとその使用度数が低くなっている。ところで、この意味グループで注目したいのは、(D)の主格助詞のところで見られたような、「が」に逆接の意味も混じっていると思われる例が、新たに出て来ることである。

引出物の馬をひき立てありけるが、幕のうちながらいななきたりける。声空をひやかしけるを……

(宇・七ノ六)

昔、経頼といひける相撲の家のかたはらにふる河のありけるが、ふかき淵なる所ありけるに、夏その川ちかく木陰のありければ……

(宇・一四ノ三)

妹尾が嫡子小太郎宗康は平家の御方に候けるが、父が木曾殿よりゆるされて下るときこえしかば、年来の郎等と

ももよほしあつめ其勢五十騎ばかりでむかへにのぼる程に……

(平・八)

田舎武者の一人有けるがこの事を後に伝聞て馬にて馳来けるが、今おきあがりて小家にはひいらむとしける時

行合て……

(十・四)

かたはものどもの集りたるが、手も足もねぢゆがみうちかへりていづくも不具に異様なるを見て……

(徒・百五十四)

以上、右に記したように、「が」に「ところ」の意を含ませても考えられる例が、先の主格の意味グループに続き、この係体言主格の意味グループでも見えていることは、接続助詞「が」が以後ますます多く出て来ることを約束しているものと思われる。

## (二) 賓格

中古で既に、「この賓格の「が」は、その使用範囲の限られているところから、漢文体の世界の語法になっているのではないかと見て来たが、中世の用法を見ると、一層その感が強まるのである。乃ち、和漢混淆文で書かれた方丈記や十訓抄では、「この賓格の「が」が10%前後と、比較的多く用いられているのに対し、和文体の文では、わず

か2〜3%の使用率を示すに過ぎなくなっている。特に、新古今和歌集ではその例がたった一つしか現われず、古今集で12例も使われていたことと比べると、歌語の世界でも、この資格の「が」はほとんど用いられなくなっているということが言えるのではないだろうか。

(6) 逆接

中古の、大和物語、大鏡、今昔物語という三作品にわずかばかり見られたこの逆接の「が」は、中世前期では、方丈記、新古今和歌集を除く全作品で用いられていた。しかし、その使用率は、各作品1〜2%と極めて低い。

さて、これを内容的に細かく見ると、そのほとんどが、これまで出て来たものと同じく予期に反した既定条件が「が」の後に来ているもの、「が」で結んだ二文の主語が一致し、しかも、その主語が各々明記されているもの、それに、主語は必ずしも一致していないが、主語同士が何らかの関係を有しているもの、そして最後にもう一つ、主語同士互いにほとんど関係を持たない二文の間に「が」が挿入されたもの、という四つの用法のいずれかに属していた。ただ、「が」でつないだ二文の主語が一致している場合、その主語が両方とも省略されて記されていないものが出て来るが、これは、用法上、今までのものと比べて大きく変わったものとは言えない。尚、ついでに言えば、後文の主語のみが略されて記されていないものは、既に、主格、又は係体言主格の項に入れて考えてみている。

ところで、この逆接の意味グループには、この時代になると、これまで出て来なかった新たな用法が見えている。それは、内容的に相反する二文を「が」が結ぶというものであるが、この場合、これを大きく二つの用法に分けて考えてみる事が出来る。乃ち、それは「が」の前後に来る二つの文の主語が一致している場合とそうでない場合とである。しかし、このいずれに於ても、助詞「が」は、左に記す例でわかるように、明らかな逆接の意を有してい

とすることが言えよう。

まず、二文の主語が一致している例としては、

あまつさへ三日とさだめられたりしが、いま一日ひきあげて二日になり（主語は福原遷都）

（平・五）

このほどは三位うたれぬとききつれどもまこともおもはでありつるが、このくれほどよりさもあるらんとおもひさだめてあるぞとよ（主語は北の方）

（平・九）

歳八十に成て見物の志更に侍らぬが、ことし孫にて候男の内蔵司の小使にて祭をわたり候があまりに見まほしく候て、ただ見候はんには人にふみころされぬべくおほえてやすく見候はむために札をばたてて侍る（主語はある翁）

（十・一）

などが上げられる。一方、主語が不一致である場合の例としては、

「法皇をば鳥羽殿へをしこめまいらせうど候が、内々は鎮西の方へながしまいらせうど議せられ候（「が」の前文の主語は侍共、後文の主語内々は清盛の内心）

（平・二）

大臣殿は鎌倉へ御くだり候が、わか公は京に御とどまりあるべきにて候

（平・十一）

などがある。ところで、右のように、内容的に相反する二文をつなぐという場合には、主語の一致、不一致に拘わらず、現在でも、逆接の助詞として、「が」が盛んに使われている。例えば、主語が一致している場合は、

私は東京には行つたが大阪には行かなかつた。

又、主語が一致していない場合には

太郎は利口ですが、次郎は馬鹿です。

などの例文がそれぞれ考えられよう、尚、ついでに言えば、先に中古で初めて現われ、この時代でも引き続き見えていた、四つの逆接助詞「が」の用法も、例を上げるまでもなく、現在盛んに用いられているものである。

以上、中古で現われた逆接の四つの意味用法の上に、更に新しく、明らかな逆接の意味を有する「が」の用法



が二つこの時代で見えている事は、「が」助詞全体の使用量から見れば、まだまだ少ないとは言え、前代に比べれば、この逆接の意味グループに含まれる「が」が、質量共に、中世前期ですつと増加していることを物語っているものと思われる。

そして、この事は、平安末期の作品である今昔物語と鎌倉時代にはいつてから成った宇治拾遺物語とを比べてみると、尚一層はつきりとする。乃ち、左に記す如く、今昔物語で接続助詞の「に」や「ども」の使われていた箇所が、宇治拾遺物語で、「が」に代わっている例が、相当量見られるのである。

比丘不聞入シテ思モ忽ヘドニ流レヌベ糸惜サニ寄テ女ノ手ヲ捕ヘテ曳上グ（今・四ノ六）

耳に聞入れじと思ひけるが、ただ流れにうきしづみ流れればいとほしくてよりて手をとりて引わたしつ（宇・一三ノ一四）

己ガ住浦ニハ非デ他ノ浦ニ田ヲ作ケルニ己ガ住浦ニ種ヲ蒔テ苗代ト云事ヲシテ可殖程ニ成ヌレバ其苗ヲ

船ニ引入テ……（今・二六ノ一〇）

おのが国にはあらで異国に田を作りけるが、おのがすむ国に苗代をして植べき程になりければその苗を舟に入れて……（宇・四ノ四）

「茂経ガ許ニコソ撰津ノ国ニ候フ下人ノ鯛ノ荒卷四五卷許今朝持来リテ候ツルヲ一二巻ハ宿ノ童部ト共ニ食ベ試候ツルニ艶ズ微妙ク鮮カニ候ヒツレバ今三巻ハ穢サツラフ不候ズシテ置テ候ツルヲ……」（今・二八ノ三〇）

「用経がもとにこそ津の国なる下人の鯛のあら巻三つもてまうで来りつるを一巻たべこころみ侍つるが、えもいはずめでたくさぶらひつれば今二巻はけがさで置きてさぶらふ」（宇・二ノ五）

右に記した例文は、先述した如く、宇治拾遺物語の本文が、果たして今昔物語を元にして書き換えられたものかどうかという問題が残るため、あくまでも、参考程度のつもりで掲げてみたに過ぎない。

しかし、いずれにしろ、この中世前期では先の中古に比べると、主格及び係体言主格の意味グループに、逆接の意味の混入していると思われる「が」の例が多く出て来たばかりか、今述べたように、逆接の意味グループにはい

る「が」の例も、割合多く見えていた。

これは、要するに、この時代になると、助詞「が」が、格助詞としてのみならず、接続助詞としても多く利用されるようになって来た事を示しているものと思われる。

それでは、以上で中世前期（鎌倉時代）についての考察を終了し、続いて、中世後期（室町時代）の、助詞「が」の意味用法はどんなものであったのか、見て行くこととしよう。

##### 五、中世後期（室町時代）

この時代の参考文献としては、キリシタン文学の中から、天草本平家物語（天）と天草本イソボ（イ）の二作品を選び出してみた。

ところで、この二つの作品に出て来た助詞の「が」について、これまでと同じく、用法、接続、意味の三つの面から考察を行なってみたところ、今までと比べて特に大きく変わった点も見当たらなかった。ただ、二、三氣のついたところがあったので、簡単に左に記しておくこととしたい。

まず、接続の面を見ると、この時代になって新しく現われた、私、しゃつ、そち、身などの代名詞、又、ぢや（であるの転）、た、などの助動詞を承ける「が」の例が、かなり頻繁に使われていることが目立った。しかし、これらは、用法的には今までのものと変わりがない。

それから、意味の面を見ると、第一に目立つ事は、中世前期までは各作品10～15%程度用いられているに過ぎなかった主格の「が」が、この時代になると、実に30%近い使用率を示すようになってきている事である。これは、左に記すような、体言を承ける主格助詞の「が」で、用言の終上形に係って行くものが激増しているために起こった現

象であると思われる。

軍がやぶれた。

(天・一)

云ひ置かうずる事がある。

(天・一)

「すござうことが安からうず。

(天・二)

「官人どもが御迎ひにまゐつた。

(天・二)

その時代の人が鼓判官と申した。

(天・三)

これが即善知識の基ぢや。

(天・四)

啓くことが稀にあつた。

(イ)

「望みが無い。

(イ)

弓箭に及ぶことが有つた。

(イ)

次に、もう一つ、意味の面で見逃してならないのは、逆接の「が」の例も、前代に比してずっとふえている事である。乃ち、これを百分率で見ると、中世前期（鎌倉時代）では各作品わずか1〜2%しか用いられていなかった。逆接の「が」が、中世後期（室町時代）にはいると、5〜7%の使用率を占めるようになっていく。特に、この逆接の意味グループで内容的に目立つのは、「が」そのものに明確な逆接の意味の含まれていないもの、乃ち、二文の間に一呼吸入れる意味で、ほとんど無意識に挿入したと思われる「が」の例がふえている事である。これは、室町期の作品である天草本平家物語が、前代の平家物語を元書き換えられたものと言われるので、両書を比べてみると、一層はつきりとする。乃ち、平家物語では句点で、はつきりと区切られていた二つの文が、天草本平家物語を見ると「が」で結ばれて一つの文になっているという例が、左に記すように、非常に多く出て来るのである。

「二人はめしかへされて都へのほりぬ。いま一人はのこされてあそこ爰にまどひありけ共行えもしらず

(平・三)

「二人はこぞの秋めしかへされて都へ上られたが、ま一人は残されてあそこここに惑ひ歩かれたがその行方な

ば知らぬ

(天平・一)

日の入給ふ所は西方浄土にてあんなり。いつかわれらもかしこに生れて物をおもはですぐさむずらんと……  
 日の入る方は極楽ぢやときくが我等もいつかあそこに行つて物を思はいですごさうぞ？

(天平・一)  
 (天平・二)

さばかり早き宇治河の水はかみにぞたへたる。おのづからもはづるる水にはなにもたまらずながれけり  
 さしも早い宇治川の水は上にたへたが、おのづからはづるる水には何もたまらず流れた

(天平・四)  
 (天平・二)

父義賢は久寿二年八月十六日鎌倉の悪源太義平が為に誅せらる。其時義仲二歳なりしを母なく／＼かかへて  
 信濃へこえ……

(平・六)

その父義賢は武蔵国で悪源太に討たれたが、その時木曾殿は二歳であつたを母御が泣く／＼抱いて信濃国  
 へ越して……

(天平・三)

「是こそさすがやす大事よ。いかがせん

(平・七)

「これこそ安大事の事ぢやが何とせうぞ

(天平・三)

「馬はかけんとおもへば弓手へも馬手へもまはしやすし。舟はきつとをしもどすが大事に候

(平・十一)

「馬は駆けうと思へば駆け、引かうと思へば弓手へも馬手へも廻しやすいものでござるが船はきつと押直す

(天平・四)

ことがたやすうないものでござれば……

(天平・四)

以上、右に記したように、主格及び逆接の意味グループに含まれる「が」が、前代に比してずっとふえているが、その反動として、連体格を示す助詞「が」が大幅に減っている事も、この中世後期で大きく目立つ点の一つである。その他、意味の面を細かく見ると、今まで使われていたにも拘わらず、この室町期の二作品では全然その姿の見えていないもの、又は、その使用率のいちだんと低くなっているものが幾つか出て来る。しかし、これらはすべて、既に、中世前期の鎌倉時代に於て、だいぶその使用度数が減少して来ていたものであり、しかも、現在ではほとんど用いられていないものである事から推して、結局これは助詞「が」の用法が現在のそれに一層近づいて来たことを示しているものとして、片づけられると思う。

以上、中世後期の二作品で現われた助詞「が」についての考察の結果、目についた点などを取りまとめて簡単に

記してみた。要するに、いろいろな方面で、現在の用法にいちだんと近づいて来たのが、この中世後期に現われた助詞「が」の用法の特徴と言えるであろう。それでは、続いて、近世の作品について、その調査結果のあらましを述べてみることにしたい。

## 六、近 世（江戸時代）

近世の参考文献としては、この時代の上方ことば、江戸ことばの違いを考慮に入れて、どちらか一方に片寄ってしまったように、世間胸算用（世）、国性爺合戦（国）、浮世風呂（浮）という三作品を選び出してみた。

ところで、これらに現われた助詞の「が」について、これまでと同じく、用法、接続、意味という三方面からの考察を行なってみたところ、とりわけ、これと言って注目すべき点も見当たらなかった。乃ち、作品の内容から来る多少の相違はあるが、総じて、この期の助詞「が」の用法は、この前の室町時代で述べた事とほとんど同じなのである。仍て、ここではいちいちその例を上げたりして事細かに記述するのを避ける事としたい。ただ、逆接の意味を有する「が」で、助詞を承ける例が、江戸も末期の浮世風呂に何例か見えていた。これは全く今まで見られなかった新しい用法なので、左に二、三その例を掲げておくことにしよう。

「あれもおめへ、前方あかたはちつとどうらくだっけが、今では塩がしみたか。それはくおとなしくなってよくかせぎます

「銚子白里三浦岬が見えたっけが、高くておいらが手にはのらねへ

「元日の朝あさばら、沙魚はぎうり売、福寿草ふくじゅうそう売などが来てさもく元日めいた心もちだっけが、福寿草は今も少しはござへやす

右に記したように、「が」が終助詞の「け」を承けるものは、今まで、逆接の意味を表わす「が」の例がすべて、

動詞又は助動詞を承けるものばかりであったので、この江戸時代になって新しく現われた用法であると言える。しかし、結局これは、逆接助詞の「が」が、今まで以上に、自由に、且つ広範囲に亘って用いられるようになって来たことを物語っているに外ならない。

要するに、中世後期で一步現代の用法に近づいた助詞の「が」は、この近世でますます現代の用法に近くなつて来たということが言えるのではないだろうか。

以上、上代から近世まで助詞の「が」について、各時代ごとに長々と考察を加えて来たが、振り返ってみると、いささかその書き方など煩雑に過ぎた嫌いがあるので、最後に今まで述べた事を全体を通してわかり易く箇条書きにしてまとめておくことにしたい。

## 七、おわりに

① 助詞「が」は上代から近世まで、地の文、歌、会話のいずれにも、いかなる制限も受けず自由に使われている。

② 助詞「が」の承接関係を見ると、体言を承けるものがほとんどであるが、用言や助動詞、それに助詞を承げる例も徐々に現われ、時代が下るにつれて、体言以外のものを承ける「が」の例がふえている。

③ 助詞「が」の意味用法は、連体格、主格、係体言主格、賓格、逆接の五つのグループに分けて考えることが出来る。

④ 連体格の助詞「が」は上代から中世前期までは、各作品50%前後の高い使用率を示しているが、中世後期を境にして大幅にその使用量が減少して来ている。

主 格	連 体 格	主 意 味	時 代						
			上 代	中 古	中世前期	中世後期	近 世	現 代	
未然形又は已然形に係るもの 終止形に係るが、指定格の「の」が前に来るもの 終止形に係るが逆接の意のはいっているもの	人 称 代 名 詞 を 承 け る も の 地 名 に 使 わ れ て い る も の 用 言 の 連 体 形 十「が」十形容詞の語幹十「と」 準 体 言	派 生 し た 意 味 用 法							○ × ○
									× × ○ ○

⑤ 主格を示す助詞「が」は、連体格の助詞「が」とは逆に、上代から中世前期までは各作品10%に満たない低い使用率を示しているが、中世後期を境にして、約倍にまでその使用量が上がっている。

⑥ 係体言主格を表わす「が」は上代から近世まで、ほぼ一貫して30%前後の使用率を示している。

⑦ 賓格の「が」は、和漢混淆文体の作品では比較的多く用いられているが、全体としてはその使用率が10%に満たず、極めて低い。

⑧ 中古も末の頃になってやっとその姿を現わした逆接の「が」は、初め1~2%の使用率を示すに過ぎないが、中世後期になると5%前後にまでその使用率が上がっている。

⑨ 以上の基本的な五つの意味用法から派生したと思われる細かな助詞「が」の用法については、次に簡単な表を掲げて示しておくことにしよう。

逆	接	係	体	言	主	格	
相反する内容の二文をつなぐもの	予期に反した既定条件を伴うもの 二文の主語が一致し各々明記されたもの 二文の主語が互いに関係あるもの 主語同士関係のない二文をつなぐもの	指定格の意に変じたもの	同	格の意を示すもの	ク語法に係って行くもの	係結びの結びと「が」に係る述語が一致するもの	体言を承けて終止形に係るもの
○ ○ ○ ○ ○		×	×	×	×	○	○

右の表のうち——の引いてある所が、その用法の使われていた事を示している部分であり、最下段の現代の項で○のつけてある所は現在でも同じような用法が使われていること、×のつけてある所は、その用法が全く姿を消してしまっているか、又は別の用法に代わっている事を示している。結局この表からは、中世後期を境にしていちだんと助詞「が」が現代の用法に近づいていることがわかるであろう。

⑩ 以上①～⑨までは、選出した25の作品を成立年代順に並べて、助詞「が」の変遷過程を見て来た結果であるが、これをジャンル別に眺めてみると、歌集に、連体格を示す「が」が多く見られた外、これと言って注目すべ



き点も見当たらなかったたので、ここに追記しておくこととしたい。

さて、上代の古事記から近世末期の浮世風呂までほぼ一一〇〇年間、時代別に考察して来た結果を以上十項目にまとめて記してみたが、結局、右のように助詞「が」が変遷して来たのは、一言で言えば、「が」の有していた連結力が徐々に薄れて来たためと思われる。

乃ち、助詞「が」は本来、二つの体言をがっちりと結んでその関係を示す（連体格、係体言主格及び賓格）か、又は、体言を承けて下の条件句に係って行く（未然形又は已然形に係る主格助詞「が」という非常に強い連結力を有していた。やがて幾らか連結力の弱まった「が」は、その前に来る文章全体を承けて主格として下の述語に係って行くようになる。（逆接の意が含まれた主格助詞「が」ところで、この場合には、まだ「が」に、前後の関係を示すという格助詞としての働が見られるが、やがて、「が」の下に完全なる一文が来るようになる）、「が」はその連結力を失い、ただ単に二文をつなぐという形式上の役目のみを果たすに過ぎなくなる。（主語同士が一致又は関係し、しかも各主語が明記されている二文をつなぐという逆接の「が」そして、連結力を失った「が」は、格助詞から接続助詞へと変じ、ついには、全く関係のない、或いは内容的に正反対の二文の間に挿入されるようになってしまう。

簡単に述べれば、以上のようなことが、助詞「が」の変遷について言えるのではないかと思われる。ところで、この「が」助詞については石垣謙二氏の詳しい研究（『助詞の歴史的研究』（岩波書店）所収、「主格」「が」助詞より接続「が」助詞へ）がある外に、幾つか既に研究論文が出ている。それら先行の研究に説かれているところは、いちいちそれを断わるべきであるが、私はただ集めた資料から自分なりに考えてみた結果を、あくまでも一つの試論として述べてみたに過ぎないので、それらの作業は今後の課題として残したい。最後に多くの方のご叱正を期待して筆をおく。尚、助詞「が」の承ける品詞及び五つの基本的な意味用法がそれぞれ何例ずつ出て来たか参考までに一応作品別に表に掲げておくことにしよう。

助詞「が」の通時的考察 (我妻)

新古今和歌集	中古 (平安時代)									上代					時代	
	今昔物語	大鏡	更級日記	源氏物語	大和物語	土左日記	古今和歌集	伊勢物語	竹取物語	祝詞	宣命	万葉集	日本書紀	古事記	作品名	承接関係 ・意味用法
64	1076	55	10	124	22	3	56	2	9	22	39	270	24	32	名詞	承接 関係 係
53	741	18	2	115	29	3	58	21	17	1	42	155	20	24	代名詞	
111	1141	36	18	484	51	9	138	27	12	0	0	133	28	34	我	
1	319	22	7	84	3	5	6	4	1	2	6	23	2	2	用言	
6	781	38	13	175	6	0	5	4	3	0	1	4	0	0	助動詞	
0	15	4	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	助詞	

199	2153	87	27	637	76	14	193	40	29	21	57	352	42	53	連体格	意味 用法
7	131	7	4	49	5	1	6	2	1	0	0	36	10	15	主格	
28	988	63	17	298	26	5	52	13	11	2	24	179	22	24	係言 主格	
1	789	11	2	2	3	1	12	3	1	2	7	18	0	0	賓格	
0	12	5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	逆接	
235	4073	173	50	986	111	21	263	58	42	25	88	585	74	92	計	

尚、右の考察及び表作製に際して定本としたものは、左に記すものを除いてすべて岩波書店発行の日本古典文学大系本である。

。紀一朝日古典全書「日本書紀一〜六」。宣一金子武雄著「続日本紀宣命講」白帝社。源一吉沢義則・木之下正雄著「対氏物語新釈」平凡社。十一国史大系第十八卷「宇治拾遺物語・古事談・十訓抄」。天一亀井高孝著「天草本平家物語」岩波書店。一〇一朝日古典全書「吉利支丹文学集下」

近世	中世後期		中世前期(鎌倉時代)						
	浮世風呂	国性爺合戦	世間胸算用	天草本イソボ	天草本平家物語	徒然草	十訓抄	平家物語	宇治拾遺物語
1178	170	157	258	1011	35	184	848	164	15
301	41	38	47	70	23	41	85	127	3
19	54	26	70	91	34	75	189	157	7
132	8	9	8	71	14	27	77	42	5
224	22	35	38	246	35	103	318	134	4
42	2	2	0	7	141	1	7	2	0

199	189	93	121	398	68	205	826	309	23
1091	55	69	108	403	9	46	205	92	0
359	34	91	165	585	51	140	393	205	2
1	7	2	3	8	12	32	60	12	9
246	12	12	24	102	1	8	40	8	0
1896	297	267	421	1496	141	431	1524	626	34